

明治初期、團菊左と並び称された歌舞伎の名優がいました。熱田出身の中村宗十郎です。名跡を継ぐ人がなく、今では耳慣れない名前ですが、当時は東西の歌舞伎界で実力を認められ、浮世絵も多く描かれた名優でした。

中村宗十郎は、天保六年(一八三五年)熱田富江町(現伝馬一丁目)の富江風呂啓助の子として生まれ、幼名初太郎。幼少時に叔父の長者町の入歯師藤井堂の養子となり、藤井重兵衛と改名します。

一三、四歳の頃、藤井堂向かえの踊りの師匠式次の家で、見よう見真似で踊りの振りや三味線を覚え、式次に入門後は、腕を上げて

一五、六歳で地元芝居の下座の三味線を弾く程になります。ところが、一七、八歳の頃、恋仲になった式次の娘の妊娠が発覚。これが養父と式次双方の怒りを買って家出。旅役者嵐亀太郎一座に拾われ、嵐亀蔵を名乗って地方の芝居に出るようになります。安政

二年(一八五五年)大阪の仕打ち師赤穂屋太三郎に見出されてはたち、にせいなかむらかんじやく、二〇歳で二世中村翫雀に入門、中村歌女蔵となりますが、まだ名古屋と大阪を行き来する旅役者でした。その歌女蔵に三榎大五郎が注目、大阪の檜舞台を踏ませます。安政六年(一八五九年)、大五郎が亡くなると、翌万延元年(一八六〇年)、初代中村雀右衛門の媒酌で大五郎の娘みちの婿となり、二世三榎源之助を襲名します。

そして、大阪歌舞伎界で人気を獲得していきます。しかし、慶応元年(一八六五年)三一歳のとき、妻みちとの離縁を機に独立。大阪に

移り住んで雀右衛門の下で中村宗十郎を名乗り、「色立役のいろたちやく いち谷、中村宗十郎」と謳うたわれるまでになります。初代實川延若じつかわえんじやく

や初代市川右團次(齊入)と共に延宗右と呼ばれたのもこの頃です。

明治六年(一八七三年)、ライバル延若が一足先に座頭ざとうになったことに腹を立てた宗十郎は、上京じょうきょうします。このような揉め事も、

宗十郎を語る上で欠かせません。大正の頃まで、大阪では口うるさい人のことを宗十郎の屋号に引掛けて「末廣屋」と呼んだそうです。

実力派で自信家、理論派で頑固者だったのです。上京した宗十郎は、中村座に迎えられ、一年余あまりにわたり東京の芝居に出ますが、この時は、さして評判をとるには到りませんでした。ただ、役やくの性根しょうねを捉とらえたインテリ型の芸は、東京向とうきょうむかきと評価ひやうされます。

帰阪きはんした宗十郎は、大阪で大活躍します。しかし明治八年(一八七五年)、来阪らいはんした三世澤村田之助と揉めた際、役者の家の生まれでないことを論あげつらわれます。そこで旧来の歌舞伎のあり方に疑問ぎもんを持って

いた宗十郎は、これを機きに行動こうどうを起こしました。明治九年(一八七六年)、役者の給金きゅうきんを下げ、舞台装置や衣装道具を質素しつそにして入場料を下げるという守田座の座元もりたぎ一二世守田勘弥ざもとじゆうにせいもりたかんや*が主張しゅちようして

いた劇場改革論げきじょうかいかくろんを、大阪で提唱ていしょうしたのです。これには、尾上多美蔵おのえ たみぞう、實川延若じつかわえんじやくはじめ幹部俳優かんぶはいゆうが猛反発まうはんぱつ。宗十郎は腹はらを立てて役者を廃業はいぎやう。四月に大阪太左衛門橋北詰たさえもんばしきたづめ*で「末廣屋藤井重兵衛」

の本名ほんなで呉服屋いぶくやを開業かいぎやします。この商売しょうばいは、とても繁盛はんじようしました。しかし、宗十郎は再び芝居しばいの世界せかいに戻かえります。きっかけは、大阪でも東京でも、相次あひつぎいで発生しはつせいした芝居小屋しばいこやの火災しやうさいでした。明治九年は、

も東京でも、相次あひつぎいで発生しはつせいした芝居小屋しばいこやの火災しやうさいでした。明治九年は、

も東京でも、相次あひつぎいで発生しはつせいした芝居小屋しばいこやの火災しやうさいでした。明治九年は、

げきじょうかさい
劇場火災の当たり年だったのです。復興のため名優宗十郎の力を
借りたい大阪歌舞伎界は、躍起やつきになって呼び戻そうとしました。しか
し、頑固がんこいつてつ一徹の宗十郎は承諾しません。やっと一〇日間だけの出演
を取付け、大入りとなったものの、宗十郎が去ればすぐに不入りとな
る始末です。結局、明治一〇年、新富座の守田勘弥に諫められ、
宗十郎は上京。「近江源氏先陣館」の盛綱を演じて大当たりをと
り、復帰とともに東西歌舞伎の制覇を果たします。以後、九代目市川
團十郎、五世尾上菊五郎、初代市川左團次と、対等の待遇を受け、
新富座でも幹部俳優の楽屋を用意されました。

ただ、そんな中でも揉め事は絶えず、明治一四年六月、新富座の「夜
うちそがかりばのあけぼの
討曾我狩場 曙」で、物語の趣旨から武具を着けないことを主張す
る曾我十郎役の宗十郎と、活歴かつれきのリアリズムで小手脛当をつけ
るべきだとする曾我五郎役の團十郎が対立。それぞれ思い思いの
扮装で演じて、「兄は川へ洗濯せんたくに、弟は山へ柴刈しばかりに」と擲揄やゆされ
たことは有名です。なお、この時の宗十郎の曾我十郎は、舞の手も
鮮やかで、実に見事みごとだったと言われています。

明治三二年（一八八九年）四月の浪花座の舞台を最後に、宗十郎は
病を得て一〇月八日、五五歳で亡くなりました。直前に延若えんじやくを失
っていた大阪歌舞伎界は、大打撃を受けます。一方、東京では團菊
左が健在、翌一一月には、木挽町に歌舞伎座が開場したのです。
宗十郎は、侍を扱う時代物にも町人を扱う世話物にも優れ
ていました。近松門左衛門作「心中天網島」の紙屋治兵衛の

かた
型は、宗十郎を恩人と敬愛した初代中村雁治郎の当り役として受継
がれ、現坂田藤十郎、現四世中村雁治郎等に伝わっています。

今、伝馬町交差点南、東海道の二本南の筋を西に四〇メートル程
行くと、笹宮に「中村宗十郎出生地」の案内札が立っています。
また、中区栄二丁目の長圓寺に石碑があり、大阪天王寺区の一心寺
には墓があります。

《注*》

- *團菊左：九代目市川團十郎、五世尾上菊五郎、初代市川左団次
- *仕打ち：大阪流の興行主。金主を兼ねる。
- *守田勘弥：旧江戸三座の一つ守田座（のち新富座）の座主。一二世は俳優ではない。
- *太左衛門橋：道頓堀川の道頓堀橋（難波）と日本橋の中間にかかる橋。南側に芝居小屋があった。

*活歴：九代目團十郎が提唱した歌舞伎のリアリズム運動。大衆受けせず失敗。

【参考にした文献等】

- 『中京芸能風土記』関山和夫／著 青蛙房 一九七〇年
- 『雁治郎自伝』初世中村雁治郎著（『日本の芸談』）所収 九藝出版一九七八年
- 『明治演劇史伝 上方篇』高谷伸／著 建設社 一九四四年
- 『名優 中村宗十郎』水野藤吉／著『熱田風土記 第二巻』所収 久和会 一九六〇年
- 『明治大正昭和 三代の名優 演劇界二月号臨時増刊』演劇出版社 一九八二年
- 『百人の歌舞伎俳優 演劇界増刊』演劇出版社 一九五五年



中村宗十郎出生地案内札



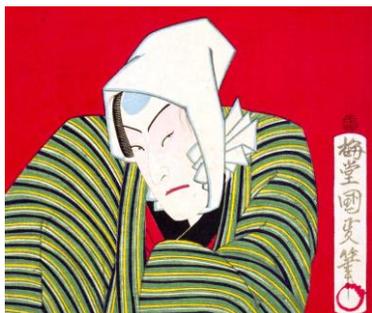
左の案内札のある笹宮



長圓寺の石碑（中区）



＜馬切＞三七郎信孝
「百人の歌舞伎俳優」1955年より



紙屋治兵衛 梅堂国政筆
（国立国会図書館蔵）